

122

2018 AUTUMN

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 22

入口広場のなだらかな段差と大きなガラス窓は、館周辺の傾斜した街路を美術館へとゆるやかに接続している。岡山県立美術館の建築家岡田新一は設計に際し、都市空間と美術館建築の連続性を重視したが、ここにもその意向をみることができるだろう。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

意外と身近な?! 創作版画—岡山ゆかりの作家たち

石田 すみれ(学芸員)

和歌山県は、恩地孝四郎(1891-1955)をはじめ、逸見享(1895-1944)や浜口陽三(1909-2000)など日本の近代版画を彩る重要な作家たちの故郷であり、和歌山県立近代美術館では、1980年頃から版画作品の蒐集に力を入れ、明治から今日にいたるまでの近現代版画を数多く所蔵しています。今回の特別展では、和歌山県立近代美術館が所蔵する国内屈指のコレクションから厳選された作品を展示し、近代日本に花開いた創作版画の名品を紹介します。

版画がすっかり美術作品のひとつのジャンルとして認識されている現代においては、「創作版画」という言葉はあまり聞きなれないかもしれません。この言葉を一口に説明するのはなかなか難しいことです。ただ筆者なりに簡単に説明を試みると、複製を主たる目的とせず、版画技法を活かした美術的な表現を目指す版画と言えるでしょう。

日本では、創作版画が登場する以前から、浮世絵にみられるような職人による分業体制で制作される木版画の伝統があり、美しい摺り物を生み出す成熟した文化がありました。木版による印刷自体も複製をつくるための手段として、今日よりずっと身近な存在でした。しかし、明治後期になると印刷技術の転換期を迎え、石版や写真印刷術などのより大量に印刷することができる新しいメディアの普及とともに、手工業的な木版による印刷は衰退しはじめました。そのようなさなか、明治維新以降の西洋文化との接触をきっかけとして、全工程を一人の作家が手掛ける新しい版画の思想が日本に紹介され、山本鼎(1882-1946)を中心に版画自体を芸術作品として制作する運動が興りました。この新しい試みはやがて創作版画と呼ばれるようになり、「自画・自刻・自摺」、つまり、自ら下絵を描き、自ら彫刻刀を手に版を彫り、自ら紙に摺って作品を仕上げることを基軸に、半世紀にわたって様々な作家たちが版画独自の表現を模索しました。

当館における初の創作版画の総合的な展覧会となる本展では、タイトルに「歩んだ道のり」とあるように、創作版画の原点とされる山本鼎の《漁夫》(図1)からはじまり、戦後にかけての版画作品およそ180点を出品し、創作版画の歴史を通観することを一つのテーマとしています。

あわせて岡山ゆかりの作家を取り上げることも目的としています。当館の収蔵品では森谷南人子(1889-1981)の木版画、寄託作品の棟方志功(1903-1975)の版画を出品します。笠岡市出身の日本画家・森谷南人子(利喜雄)は、大正3(1914)年頃から日本画や油彩画の制作と並行して木版画も制作しました。版画制作をはじめた詳しい経緯は明らかではありませんが、京都市立美術工芸学校の同窓で、親しく交流していた陶芸家の河合卯之助(1889-1969)



図1: 山本鼎《漁夫》1904年 和歌山県立近代美術館



図2: 森谷南人子《田舎の家》1925年頃 本館蔵

の影響があったと考えられています。陶芸以外の分野でも幅広く活動した河合は、大正3年から翌年にかけて、集中して版画制作を行っています。この時期、森谷は河合とともに同人誌『黙鐘』に参加し、木版画作品を寄せています。さらに大正7(1918)年4月には「森谷利喜雄木版画会」を開いて版画の頒布も行いました。また日本創作版画協会の展覧会に出品したり、版画雑誌に作品を提供したりと、版画制作に本格的に取り組んでいました。大正時代の木版画作品は風景を主題としたものが多く(図2)、彫った跡を残して強調する作風が見受けられますが、昭和4(1929)年頃の作品は、静物を主題とした平明でより色鮮やかな作品に仕上げられています(図3)。



図3: 森谷南人子《色糸》1929年 本館蔵

一方の棟方は、その独特な作風のため、創作版画の観点からは語られることが少ない作家ですが、創作版画と無縁の存在ではありません。棟方が版画制作を志すようになったのは、大正15(1926)年、国画創作協会第5回展に出展された川上澄生(1895-1972)の《初夏の風》に感銘をうけてのことでした。後には、指導者としても活躍した平塚運一(1895-1997)を訪ねて木版画を習っています。さらに棟方も版画雑誌に作品を寄せ、日本創作版画協会展に出品していました。



図4: 谷中安規《ドラゴンズドリーム》1939年
和歌山県立近代美術館

他にも、内田百閒(1889-1971)の著作物の挿絵を手がけた谷中安規(1897-1946)(図4)や、厳密には自刻自摺の作家ではありませんが、月映の作家にも多大な影響を与えた竹久夢二(1884-1934)(図5)など、岡山ゆかりの重要人物がいます。



図5: 竹久夢二《得度の日》1912年 個人蔵

また出版物に関しては、岡山市出身の料治熊太(1899-1982)と現久米南町出身の志茂太郎(1900-1980)の活躍も見逃せません。料治は雑誌『白と黒』や『版芸術』を出版し、谷中安規や棟方志功ら多くの版画家たちを世に紹介しました。自らも朝鳴の名で版画作品を発表しています。志茂太郎は、東京で酒店を営みつつアオイ書房を設立し、版画家たちとともに数多くの活版本を手がけ、本づくりに情熱を注ぎました。本に貼り付けて所有者を示す、蔵書票と呼ばれる小さな紙片を日本で普及するのに尽力した人物でもあります。

以上、岡山ゆかりの作家たちについてごく簡単に取り上げましたが、まだまだ魅力的な作家たちがたくさんいます。今秋は是非展示室で、版表現に魅了され、版画制作に情熱を注いだ作家たちが織りなす創作版画の世界をご堪能ください。

大久保英治展 日常の歩行—伽耶六国から吉備へ—

廣瀬 就久(主任学芸員)

大久保英治氏(1944-)は兵庫県西宮市に生まれ、幼少時から高校在学時まで矢掛町に育ち、現在大阪市に在住する美術作家です。

1980年代の英国で「ランド・アート」に出会い、都市から離れ自然の素材を利用して素描や写真を制作しました。1990年代半ば以降は、四国八十八ヶ所を結ぶ遍路道(1998-99)や、松尾芭蕉『笈おひの小文こぶみ』の大和路(2009)、木喰廻国修行の道(2005-07, 2015-16)など、大久保氏が関心をもつ地域を巡り、歩行する「ランド・アーティスト」として作品を発表しています。

立体から写真(図1)、素描、動画など、媒体は多様です。美術館、画廊のほか、屋外でも作品を制作します。国内では、徳島県立近代美術館(1999)、やかげ郷土美術館(2014)などで個展を行いました。

世界各地で作品を発表していますが、韓国との関わりは長くて深いものです。最初の渡韓は1980年でした。貫敷美術館(ソウル, 1983)、鳳山文化会館(大邱, 2016)などでの個展があります。2015年には、昌原市鎮海区チャンウォンで、大作《三望庭チネ》(図2)を屋外に設置し、制作歴での節目になりました。

この展覧会では、韓国を題材にした、また韓国で制作した、これまでの作品を広く紹介します。そして鬼ノ城や朝鮮

通信使などを踏まえながら、岡山の歴史や文化と、韓国の歴史や文化を関係づける新作を発表します。

関連展示として、大久保氏とともにワークショップ[当館と総社市、瀬戸内市牛窓町で開催(昨年5月、9月)]の講師を務めた、朴徹鎬氏パクテョルホと申京愛氏シンキョンエの作品を取り上げます。

以下のとおり関連事業を行います。いずれも観覧券が必要です。

1. 大久保英治氏と加藤義夫氏(美術評論家)による対談
9月29日(土) 14:00-15:30 於: 展覧会場
2. 美術館講座「歩行と美術—大久保英治 歩く現場から—」
講師: 友井伸一氏(徳島県立近代美術館上席学芸員)
10月13日(土) 14:00-15:30 於: 講義室と展覧会場
3. 学芸員による展覧会解説
講師: 廣瀬就久
9月28日(金) 18:00-18:30 於: 展覧会場
11月3日(祝) 14:00-15:30 於: 講義室と展覧会場

大久保英治氏は、8月21日現在、新作の準備中です。地下展示室と屋内広場で大作を発表します。どうぞご期待ください。



図1:《影シリーズ れんげと影》
(徳島県阿南市五社神社付近で制作)
カラープリント 1998年 作家蔵



図2:《三望庭》2015年 アートスペースChoA [昌原市鎮海区、慶尚南道、大韓民国]

【岡山の美術 特別展示】「岡山の作家☆再発見Ⅶ 大久保英治展 日常の歩行—伽耶六国から吉備へ—」

【岡山の美術】第2期:平櫛田中(井原市出身)の木彫、佐藤一章(矢掛町出身)などの油彩画、現代美術(朴徹鎬、申京愛作品を含む)

(会期:2018年9月26日~11月4日)

鑑賞ツールとしての“触る絵画”—現状と今後—

岡本 裕子(主任学芸員)

当館では、岡山県立岡山盲学校との連携を契機に視覚障害者と共に作品を楽しむことに取り組んでいる。絵画作品は言葉による鑑賞を行っているが、立体作品を「触察+言葉による鑑賞」でみた時に得られる当事者の満足度(実感を伴った理解)とはやはり異なる。そこで、『鑑賞ツールとしての“触る絵画”』(以下、“触る絵画”)の制作に取り組んでいる。

“触る絵画”として制作する作品は、原則所蔵作品の中から、児童生徒が実感を伴った理解が起りやすい傾向の作品を6点選定した(※1)。そして触察するという視点を踏まえ「わかりやすい／触りたくなるような／想像力を刺激する“触る絵画”」を目指した。これらの要素を担保するため、触知案内板や“触る絵画”の制作経験が豊富な小川真美子氏(点字・触図工房BJ)に監修、藤下直美氏(名古屋盲人情報文化センター／全盲の視覚障害者)に触読校正を依頼した。そこに教育普及担当学芸員が入り、視覚情報と触覚情報を受け取る回路や情報内容の特性を、三者で意見交換しながら制作をすすめた。“触る絵画”は、手や指先で直接触察するので、触り心地—手や指先に触れた時の適度な抵抗感や凹凸の種類—は重要な要素となる。また、作品に描かれている情報を触ること、想像力が刺激され感動や共感が生まれる“触る絵画”となっているかどうかというクオリティが求められる。一例として、《ピエトロ・ミカの服装の男》(松岡寿)(図1)の“触る絵画”(図2)について紹介する。まず、人物画は比較的触察しやすい図像になるとのこと。画面向かって左端の情報はノイズになるので省略し、目の周りの表現については、眉と目の間隔を実際より広めにとることで、情報を触察しやすいようにした。また、凸の部分—帽子、帽子の飾り、髪、髭、服の装飾など—は、線と面の種類や凸部分の高さを変化させることで、触る楽しみやわかりやすさとなるよう制作した。

今年6月、全盲の児童生徒5名(小学生4人・中学生1人)と「“触る絵画”の触察+言葉による鑑賞」を行った。そこで新たに課題としてあがってきたことは、“触る絵画”をしっかりと触察することが出来る人が少なくなっているということ(※2)。触察が出来なければ何も起らない。図3、4は、その時の児童生徒の触察の様子である(触り方Bは、生活の中で触察することに慣れている生徒の様子)。そこで、今年度新たな取り組みとして、触り方をゲーム感覚で体験できる—晴眼者が作品の見方をアートゲームによってつかんでいる—ようなツールの制作に取り組むこととした。年度末に『ワークショップ“触る絵画”』を開催し、そこで“起こること”を検証したいと考えている。



図1: 松岡寿《ピエトロ・ミカの服装の男》
明治14(1881)年



図2: 触る絵画



図3: 触り方A



図4: 触り方B

※1 松岡寿《ピエトロ・ミカの服装の男》、原田直次郎《風景》、原撫松《老人像》、不詳《渡唐天神図》、雪舟等楊《渡唐天神図》、藤本鉄石《放魚図屏風》

※2 視覚障害者のパソコン利用が一般化し、「点字離れ」が進んでいる。また、中途失明者は、概して点字の触読が苦手である。

浦上秋琴《山水図[散歩多勝遊]》

中村麻里子(学芸課長)

岡山県立美術館では平成28年度に、一般財団法人林原美術館より浦上家伝来資料148件を受贈した。これらの資料は、江戸後期の文人画家・浦上玉堂(1745-1820)の後裔である浦上家から同館に寄贈されていたが、浦上父子調査研究活動を一層促進する目的で県立美術館に寄贈する運びとなったのである。この資料の中には生前の玉堂の姿を最もよく伝える浦上春琴筆《浦上玉堂像》や、玉堂の作品、また『玉堂琴譜後集』草稿をはじめとする音楽関係資料などが含まれている。これらの全体像については、筆者が『岡山県立美術館紀要』第8号(平成30年3月発行)において概略を紹介したので、ご参照いただきたい。

この寄贈品の中に、浦上秋琴(1785-1871)《山水図[散歩多勝遊]》が含まれる。これまで当館所蔵の秋琴作品は小品1点のみであったが、本図は縦139.0×横62.2cmの大幅で、晩年の秀作に挙げうるものであり、大変喜ばしいことである。

秋琴は浦上玉堂の次男として岡山に生まれた。名は遜、字は仲謙、通称紀二郎。寛政6(1794)年父の脱藩に伴い、岡山を発ったときはまだ10歳であった。大坂を経由して江戸に向かい、翌年会津藩に招聘された父とともに、会津へ到着。10月には会津藩藩士となり、7人扶持を給された。その後27歳で会津藩雅楽方頭取になるなど音楽面の活動が中心であったが、その後は音楽に限らず一般の藩士として勤め、70歳で隠居してからは詩書画に親しみ作品を残す。

秋琴の次男宗尚むねひさは、文政12(1829)年春琴の娘恒と結婚し、備中鴨方藩士として浦上家を岡山で再興させる。その縁にちなみ秋琴は戊辰戦争直後の明治2(1869)年、会津を離れ、当地にて宗尚一家と同居するに至り、87歳で亡くなるまでの2年余りをここで過ごした。

本図には「散歩多勝遊／庚午晩春八十六翁／秋琴」と款記があり、「紀遜」(白文方印)が捺され、亡くなる前年3月の作品であることがわかる。会津から岡山に帰って少し落ち着き、穏やかな日々を送りつつ書画を楽しんでいたのであろう。

木々の葉の中を歩き回るかのような動きのある描線で、自然の景物を描いている。画面下方には四阿あずまやで清談を楽しむ3人の姿があり、左下にはそこへ向かう友人が橋を渡っている。秋琴画の魅力は、職業画人ではない彼が、自由に筆を揮う楽しさが画面に満ちていることであろう。生き生きとした描線は、とらわれの無い自由な精神を感じさせる。



浦上秋琴《山水図[散歩多勝遊]》明治3(1870)年 本館蔵

展覧会スケジュール

9月
September

8月31日|金|—9月30日|日|
【特別展】
生きてゐる山水
—廬山をのぞむ古今のまなざし—

9月5日|水|—9月16日|日|
第69回岡山県美術展覧会

9月26日|水|—11月4日|日|
【岡山の美術展】
大久保英治展
日常の歩行—伽耶六国から吉備へ—

10月
October

10月5日|金|—11月4日|日|
【特別展】
新たな表現をめざして
創作版画が歩んだ道のり
和歌山県立近代美術館コレクションを中心に

職人による分業体制で制作される浮世絵という木版画の伝統があった日本では、明治維新以降、全工程を一人の作家が手がける新しい版画の思想が西洋からもたらされ、近代的な美術表現としての版画制作が追求されるようになりました。この新しい試みは創作版画と呼ばれ、様々な作家たちが「自画・自刻・自摺」をモットーに、約半世紀に渡って版画の持つ独特の表現を活かした作品の制作に取り組みました。本展では、和歌山県立近代美術館が所蔵する国内屈指のコレクションから厳選された作品を紹介します。あわせて当館が収蔵する棟方志功と森谷南人子の作品も出品し、郷土ゆかりの作家の活動もふまえながら、近代日本に花開いた創作版画の魅力に迫ります。

9月29日|土| 14:00～15:30
対談 「大久保英治
—韓国との関わり—」(仮称)
 講師 大久保英治氏(出品作家)、加藤義夫氏(美術評論家)
 会場 地下1階展示室 ※要観覧券

10月6日|土| 14:00～15:30
記念講演会 「和歌山県立近代美術館の
創作版画」
 講師 井上芳子氏(和歌山県立近代美術館学芸課長)
 会場 2階ホール(先着210名)

10月13日|土| 14:00～15:30
美術館講座 「歩行と美術
—大久保英治 歩く現場から—

講師 友井伸一氏(徳島県立近代美術館上席学芸員)
 会場 地下1階講義室、地下1階展示室
 (先着70名)※要観覧券

10月14日|日|、27日|土|
WS 「木版画摺り体験」
 講師 タイラ・コウ氏(創作版画家)
 会場 地下1階屋内広場 ※要事前申込

11月
November

11月9日|金|—12月9日|日|
【岡山の美術展】
I氏賞受賞作家展
有永浩太・安中仁美・入江早耶・櫻尾聡美
【岡山の美術展】
もっと伝統工芸 作品の模造

11月15日|木|—12月2日|日|
【特別展】
第65回 日本伝統工芸展岡山展

日本伝統工芸展は、日本の優れた工芸技術の保存と今日的な活用を目的に開催されている国内最大規模の公募展で、厳選された優秀作品約280点を展覧します。出品作家による列品解説会や伝統工芸に親しむ体験イベント等も合わせてお楽しみください。

10月28日|日| 13:30～17:00
WS 「ミニ登り窯焼成体験」
 協力 岡山県立大学
 会場 岡山県立大学アトリエ棟
 (申込先着2名1組で10組(計20人)まで)

公式ホームページでは
 展覧会で行われる
 ギャラリートークやイベントの
 最新情報を公開中。

www.okayama-kenbi.info

ポーラ展と被災から

守安 収

本日(8月25日)朝10時20分、特別展「ポーラ美術館コレクションーモネ、ルノワールからピカソまで」6万人目の入館者に記念品を贈呈しました。連日大勢の来館者をお迎えし、職員一同てんてこまい。かつては入場制限をするために会場入口までポールを立てめぐらせてロープを張ることがしばしばでした。今回の盛況は、そんなノウハウを受け継いでいない若い館員には良い経験になったことでしょう。▼ところで、本展のオープンは7月6日。その日の夜から翌朝まで、例えようがないほどの大雨によって、倉敷市や総社市を中心に甚大な被害が発生しました。災害の少ない地域という認識(それは誤解でした)が浸透していたが故の油断があったようです。被災状況は新聞やテレビでの報道そのままの激しく、本当に痛ましいものでした。当館の場合は7日を休館にしましたが、市街地の高台で岩盤の上に建つ館は、8日からは平常に戻り、いよいよ明日は最終日です。今回のことで、館は作品の展示や保全にとどまらず、地域や住民の安全とか安心のシンボルとしての存在価値があると実感しました。▼文化財レスキューについては、全国各地の関係機関や諸施設の協力を得ながら岡山県文化財等救済ネットが主体となって活動しています。私どもの職員も参加しておりますが、作業はこれから相当期間続くこととなります。生み出し、築き上げていくには時間がかかりますが、壊すのはほんの一瞬です。文化財に限らず、天災、人災を問わず、私たちの世代でなにもかも喪失してしまうことは許されません。知恵を使い力を尽くして後世に私たちの宝物を伝えていかねばと決意を新たにしました。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

ポーラ美術館コレクション展が閉幕しました。みなさまに館ニュースが届く頃には「生きてゐる山水」展も会期終盤でしょうか。ポーラ展では約半数の出品作品を撮影可としたため、われわれもSNSを通してたくさんの鑑賞記録にふれることができました。人々が作品の前にカメラやスマートフォンを構える光景は見慣れないものだったかもしれませんが、いかがでしたか？岡山県立美術館は、手話付きフロアレクチャーや月に一度の託児サービスも含め、さまざまな人がさまざまな方法で楽しむ手段を日々模索しています。ぜひウェブサイトやSNSでチェックしてみてください。